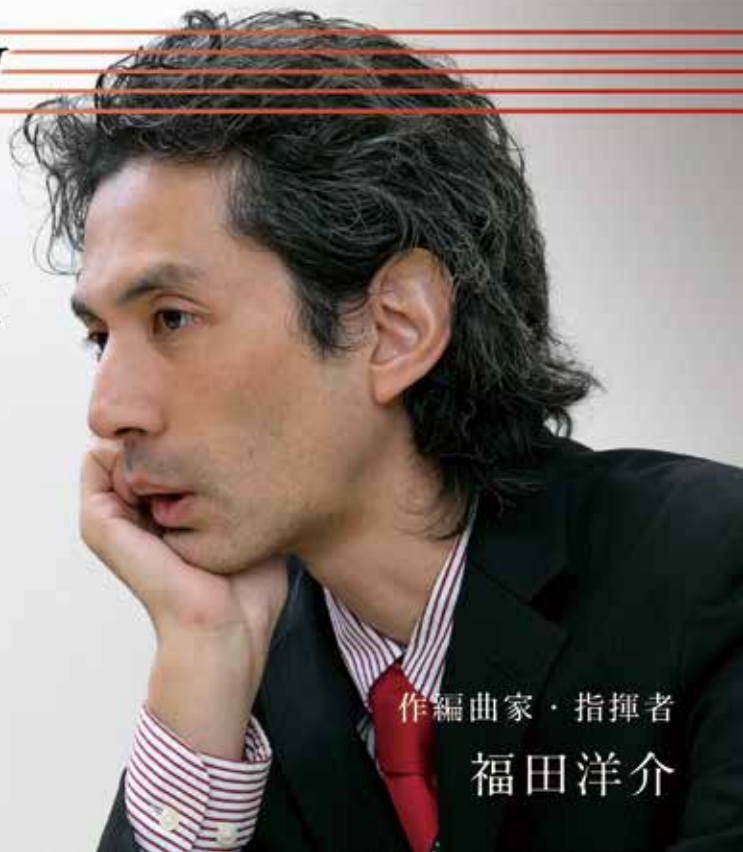


楽譜という「白黒」の世界に どんな色をつけるのかは、 演奏者自身

～自分の音楽に自信をつける学びを心がけて～

作曲家・指揮者
福田洋介



——福田先生が作曲家になられたきっかけは何ですか？

福田：作曲そのものをやり始めたのは10歳ぐらいです。特に音楽の専門教育を受けたわけでもなく、本当に偶然なんです。実は私は幼稚園の頃から集団生活が苦手で（笑）、一人遊びが多く、人と違うことをしたがる子どもでした。小学校に入ってもその性格は変わらずいたのですが、たまたまある日、父がパソコンを持って帰ってきたのです。父は音楽関係の仕事をしており、ラジオDJやFM番組の企画、それから電子楽器の事業をしていたこともあります。そんな父が、まだ家庭にパソコンが普及していなかった時代に、作曲のソフトが入ったパソコンを持って帰ったものだから、私も興味津々でそれを触ってみました。そのソフトは音符を入力すると曲が鳴るというもので、さっそく私は音楽の教科書の巻末にあった器楽合奏のスコアを入力してみました。これが私の性格にぴったりとハマりまして、学校から帰ったらすぐにパソコンを立ち上げ、次々と曲を入力する日々が続いたのです。そのうちに、これまた自宅にあったシンセサイザーでも遊び始めて、ドビュッシーを編曲したのを覚えています。

——天才少年だったわけですね。

福田：そんな大それたものではなく、ただクラシックの楽譜を見ているうちに、少しずつ曲の構造が頭に入っていった感じです。だから10代前半の愛読書はオーケストラのフル

スコアでした（笑）。その遊びを30年以上続けているだけです。

——ところで福田先生の「風之舞」という作品が、全国の吹奏楽団体や中学・高校で盛んに演奏されていますね。この曲は日本的な響きが特徴ですが、それには何か理由がありますか？

福田：西洋の五線譜の音楽は、日本人にとってはあくまで「借り物」ですので、いつも違和感がありました。そんな私に影響を与えたのが、作曲家の三善晃さんです。三善さんはフランスでの音楽留学から帰国した後、日本語としての音楽を突き詰めていった人です。日本人が感じる間の取り方や言葉などを、素直に曲にして書き表してくれました。もちろん私は三善さんの域にたどり着けるわけはないのですが、ただ、日本人ってこうやって言葉を並べたらいいんだ、ということ学びましたね。あわせて、「浪速のバルトーク」と呼ばれた大栗裕さんの作品からも影響を受けました。大栗さんは、祭囃子をテーマにしたり、西洋楽器で日本を語るということはかっこいい、ということ中学2年生の私に示してくださいました。だから、「日本語を喋れる作曲をしてみたい」という10代の頃の気持ちの延長線上に、「風之舞」が自然に生まれた感じです。

——福田先生の音楽の世界観は、五線譜には収まりきらなかったわけですね。

福田：そうかもしれません。日本の音律はすごく微細である一方で、すごくいい加減なんです（笑）。かつて日本の民謡を調べた時期があったのですが、やってみたらまるで平均値が取れない（笑）。それがすごく面白くて。隣のオヤジはある箇所を、全音ではなく半音で歌うとか、別の箇所を1拍ではなく2拍で歌うとか。杓子定規ではなく、やんわりと決まっているのがとても日本的だと思います。これは五線譜を使って音楽をやっている人には理解できないかもしれません。先日、学生とそんなことを話していたら、ふと、「日本の音楽は筆書きで、五線譜の音楽はペン書き」という言葉が出てきました。



——なるほど！「日本の音楽は筆書き」。名言ですね。筆書きは表情記号も兼用しているわけですね。

福田：日本の「書」というものが世界的に注目される所以が少しわかりますよね。だからといって、私は筆で曲を書きませんが（笑）。

——先生の作品は中学・高校などの部活動やコンクール等で数多く採り上げられています。初心者でも親しみやすいメロディラインを持ちつつ、豊かで幅広い響きのオーケストレーションが先生の作品の大きな魅力であり特徴かと思えます。オーケストレーションするにあたって、何か心掛けていらっしゃることはありますか。

福田：スコアリングそのものについては、この50年ぐらいアメリカでもヨーロッパでも日本でもたくさんの議論がなされていて、50年前に良いとされていたことが、現在では良くないことであったりします。だから私は、自分が描いた世界の再現、というよりも、演奏する人たちのツールにしてもらえればいいな、とだけ考えています。楽譜を買ってもらい、演奏してもらうことで、曲が初めて曲として成り立つ（生きる）んです。そのため、演奏する人たちが興味を持ってくれるような、そんな音符の並べ方をしているだけです。これは作者としての視点なのですが、「その楽器の一番良い音」を出してあげればいいんです。楽器を演奏する人に音符を預けて、「一番良い音を出して」と言うと、エネルギーに演奏できますよね。すると音も厚くなるんです。一生懸命練習もしてくれますし。それから、音楽をやっている人たちは美的感覚が鋭いんです。かっこよくないもの、美しくないものはやらないんです。だから素直にやれば、おのずと良いものになるはずなんです。私が指揮者として一番大事にしていることも、そのへんにありますね。

——オーケストラは団員のコミュニケーションが大切かと思いますが、指揮者として団員をまとめ上げる工夫とはどんなものでしょうか。

福田：指揮者の役割って何だろうと、いろんな人たちと話をしているのですが、その中で私がたどり着いた一つのキーワードは、指揮者の英訳である「コンダクター」という言葉です。指示を出す人＝ディレクターと違い、ツアーコンダクターという言葉もあるように、コンダクターは「連れていく人」なんです。「あちらにどうぞ」「次はこんな楽しいことが待っていますよ」と、メンバーにワクワク感を提供するのがコンダクター。だから私

も、東邦音大のウィンドオーケストラのソリストに、「俺の言うことを聞け」という感じではなく、「このテンポはどうしたい？」と聞いたりしています。



——全国の中学・高校の吹奏楽を指導する先生方に、作曲家の視点から見て生徒を指導する際のアドバイスはございますか。

福田：最近、中学生や高校生と練習している心がけていることは、「粘らせましょう」ということです。子どもが粘るようにすることが、大人の務めだと思っています。そのように粘ることが身につくと、自分で勝手に成長するんですね。あと先生方には、子どもたちと一緒に音楽を楽しんでほしいです。子どもたちは楽しみたくて部活に来ているので、先生はすごく忙しいのはわかるんですけども、先生方が一緒に楽しむと子どもたちはもっと楽しむようになるものです。音楽はもともと楽しいものなので、苦しまないでほしいです。時間がない、思い通りにいかない、と苦しんでいる先生が多いのですが、せっかく音楽をやっているのなら、大人も子どもも、音楽と一緒に楽しむ仲間として、楽しんでほしいですね。それができた時に音楽が湧き上がるんじゃないかなと、あくまで理想論ですが、思っています。

——最後に、先生の作品を演奏している多くの演奏団体や中高生、また本学の学生・生徒にメッセージをいただけますでしょうか。

福田：自分の作品を演奏してくださる方々に対して、私自身、作品にメッセージを書き添える立場ではないので、お預けした楽譜をエネルギーに演奏してみて、その先に見える面白い世界というものを存分に楽しんでいただければと思います。私は音符を並べる人ですけども、その世界を実際に音として描けるのは演奏する人たちなので、どんな結末になったとしても私は面白いなと思っています。楽譜という「白黒」の世界にどんな色をつけるのかは、演奏者自身だし、演奏する人がその曲を育ててくれればいいですね。そしてたくさん演奏していただき、いろんなパターンを試してみて、ご意見をいただけたら嬉しいですね。それが曲そのものの成長にもなりますので。自分が作った作品ですが「その曲はあなたのものです」と思っています。それから音大の学生には、これはウィンドオーケストラでも最初に伝えていますが、音楽学校で学ぶということは、音楽を伝える人たちの代表になるための準備だということです。君たちは世界にどう音楽をシェアさせるのか、という責任を負った、ある意味エバンジェリスト（伝道者）なんです。そのためには自身の音楽に自信を持ってほしいなと思います。自分らしい音楽をちゃんと持った上で、音楽は面白いんだよ、というメッセージが備わっていれば、あなたのことを受け取ってくれる人が増えていき、そうすると音楽はもっと広がるんだ、ということに肝に銘じてほしいです。だから音大にいる間は、是非自分の音楽に自信をつける学びを心がけてください、と伝えたいです。これが一番大きなメッセージです。

——ありがとうございました。



作編曲家・指揮者

福田洋介（ふくだ ようすけ）

1975年東京杉並生まれ。現在まで作・編曲は独学。吹奏楽・管弦楽・室内楽の作・編曲および指導・指揮に力を注ぐ。CDや楽譜を各社より多数出版され、国内外で作品の評価が近年高まっている。佐渡裕 & シエナ WO、SEKAI NO OWARI、海上自衛隊音楽隊などの作編曲担当としても活動し好評を博す。また、学生団体・一般団体の常任・客演指揮も精力的に務めている。

東邦音楽大学・特任准教授、同学ウィンドオーケストラ指揮者

◇代表作◇ さくらのうた 吹奏楽のための風之舞